年頭のご挨拶

～心の舵を持つ～

沖縄総合事務局長　**久保田　治**

新年あけましておめでとうございます。皆様には、平成28年の幕開けをご家族とともに穏やかに迎えられたこととお慶び申し上げます。

私にとっては、沖縄で迎える4度目（3度目の沖縄勤務）のお正月となりました。最初に沖縄の仕事に携わったのはかれこれ28年前になります。沖縄のこの30年間を思い起こしてみると、沖縄の社会経済の順調な発展ぶりには眼を見張るものがあります。現在の沖縄の発展は県民の皆様のたゆまぬ努力の賜物であるとともに、この発展を縁の下で支えてきた沖縄総合事務局も一定の役割を果たしてこられたのではないかと感じております。

30年前の沖縄県は、水資源に恵まれず、数多くの小規模離島を抱える島嶼県であり、雇用吸収力のある大きな産業にも恵まれない状況にありました。昭和47年の本土復帰以降、本島北部に10のダムが建設されるとともに、地下ダムによる利水が可能となりました。また、この間、数多くの離島架橋が完成し、本島や宮古島などと結ばれました。また、観光業に至っては、年間700万人以上の観光客が訪れる日本有数の観光地として人気を博するまでになりました。さらに、近年では離島県であるハンディキャップを克服するものとして、インターネットを活用したIT産業の立地も進んでいます。県民生活や産業活動を支える縦横に張り巡らされた道路網や港湾、空港の整備も進められました。

今回赴任して強く感じたのは、県内の経済界等の皆さんの意識が県外、それもアジアとの交易に向けられていたことです。前回の赴任からわずか2年でありますが、この2年間で、那覇港の国際船客ターミナルのオープン、那覇空港の国際線新ターミナルの供用開始、更に11月には国際航空物流ハブを生かしたロジステッィクセンターのオープンと県内の国際面での機能整備が図られて参りました。また、観光の面でも円安基調も手伝って、インバウンドの観光客数が急増するなど、「爆買」という新語ができるほど国際旅客の入り込みが目立った一年でありました。

その昔、琉球王国時代には、高度な操船技術を身につけ、風と自らの勇気でもってアジア諸国に乗り出し、各地の産物を持ち帰り、日本や中国と交易することで国を富ませてきた「万国津梁」の精神と経済活動がありました。

沖縄が本土に復帰して今年で45年目となります。この間、「本土との格差の是正」という観点で各種の社会資本整備や産業振興が進められてきました。これからは「格差の是正」という消極的な観点ではなく、沖縄の地の利や特性を生かすための積極的な社会資本の整備やそれを生かした経済活動を支える人材育成が重要となってきていると感じております。「万国津梁」のDNAを受け継ぐ沖縄の皆さんならば、アジアの世紀と言われるこの21世紀にアジア各国に乗り出し、現代の「南海の勝地」を築き上げてくれるものと期待しております。

最近、知人から琉球王国時代の偉人である名護親方の「琉球いろは歌」というものをいただきました。この名護親方が詠んだ歌の中に次のようなものがあります。

「艪舵定（るかじさだ）みてぃどう 船（ふに）ん走（は）らしゆる 寸分（すんぶ）はじらすな 肝（ちむ）ぬ手綱（たんな）」

（意味：船は艪（ろ）と舵（かじ）でしっかり定めて走らせます。人の人生は、心の手綱が大切です。方向をずらさないでしっかりと持つようになさい。）

この歌にあるように、今後の沖縄の進路をしっかり定めて、関係者が心を一つにして頑張って参りましょう。

本年が皆様にとって幸多い一年となることをお祈り申し上げます。